

〔表の見方〕

最初に、調査の5により、文科系的なもの、理科系的なもの、どちらでもないもの、のそれぞれに分類した。以下、例えば、表1（2年生）の「文科系的な者に適するとした者、57名で、そのうち、「文文」の39名は、調査の1、2で文科系の科目に○印をつけた者〔注1、2の各々で、文、理の両方に○印をつけた者については、○印の多い方にいれ、同数の場合はどちらでもない者にいれる。〕

次に、その下の表は上の57名について、調査の3の(1)、(2)の両方ともイに○印をつけた者（イ、ロ）は(1)の方がイで、(2)の方がロに○印をつけた者の人数である。その下の図は3による分類の各々を調査の4のイロハについて分類したものである。

この調査により、生徒の適性は、授業科目の興味と得意、不得意によって、かなり決められており、自己の性格を文科系的な者は、内向的、理科系的な者は外

向的と考えているようである。従って、無作意に抽出した3年生の51名に対する表3において、Y・Gテスト（性格検査）の思想的内向性、外向性と社会的内向性、外向性により、調査すると、Y・Gによると外向性であるが、自己は内向性であると思う者が多い。これは、3年生の現在の状態又は校風によるものであるかもしれないが、やはり、文科系的な者に対しては、内向性の者が多く、理科系的な者は外向性が多い。従って、問題を解く場合においても、表により、文科系的な者は、思考時間が短かく、単一的であるのに反して、理科系的な者は思考時間が長く、多模的であるのではないかと思います。

今後、この思想的内、外向性、社会的内、外向性及び、授業科目の興味、得意、不得意、と思考時間、性質がどんな要因によって形成され、又どの様に変化し、文科系的な者、理科系的な者に、分かれる要因を調査したいと思います。

（富田）

3. 進路指導と適性について

1. 進路と適性

大学への進学にあたっては自分の適性をよく考慮せよということがしばしばいわれる。この適性というものが何を意味するのか必ずしも明確ではないが、まず常識的に考えて、大学教育を受けるにふさわしい性格的特性、学力といったものが中心をなすと考えられよう。それに附随的なものとして身体的条件も挙げられる。しかし現実にはさまざまな条件をかかえた進学希望者が、その進路を決めるにあたり、適性をどこまで考慮しているか、またどの程度迄考慮し得るものなのかはなほ疑問である。ここで今の進学希望者の標準的な志望校決定の現状を眺めて、そこに適性というものがどのような形で考慮されているか考えてみたい。

2. 希望校・学部の決定の現状

大部分の生徒は、特に都会地の普通課程の場合、すでに入学時から漠然としたものではあっても進学のことを考えている。しかし自分の志望する学部系統がある程度具体的に定まってくるのは第2学年になってからである。学校によってはこの学年から文科・理科の別コースに分けたカリキュラムをしく関係上、いやおうなしに決定をせまられることにもなる。そしてこの時期における希望決定は生徒みずからの興味関心の

有無強弱によって左右されているのが現状である。興味関心というものが適性と密接な関係を持つことはいうまでもない。むしろ関心のまったくないところには適性はまずないといってもさしつかえなからう。しかし興味がそのまま適性につながるとは必ずしもいえないのである。

一部少数の者ではあるが、家の職業を継がねばならぬ者などに、適性の有無にかかわらず学部が決定せられる場合がある。また特にある方面をやりたいといった積極的な意欲はなく、ただ何となく周円のあるいは社会的な風潮にのせられて、どこへでもよいから進学したいといったような者もある。後者の場合、学部決定ははるかにおくれるか、または最後まで決めずにいて入りそうなところだけをねらうかするのが普通である。

希望校をきめる最も大きな手がかりは学力である。特に第3学年においては実力テスト模擬テストなどひんぱんにくり返され、いや応なしに自分の学力に注目させられる。学力も適性の一部と考えられるが、これに関する限り、そのデータは詳細にわたって吟味され、最もゆきとどいた指導がなされるのが普通である。しかしここに一步その運用を誤ると大きな問題をはらむことになる。学力という適性を重視するあまり他の性格的特性を無視し、時には本人の意志に反して

D. 継続的計画的な進路指導についての研究

志望校ないしは学部までも強制することが現実であり得るからである。また経済上地理的条件が志望校の選択範囲をせばめる場合が非常に多い。時にはこのために学校のみならず学部の範囲も限られてしまうことがある。適性をとやかく言うてはおれないかもしれないのである。

3. 指導上の問題

このように生徒の志望校及び学部の決定は、まず自分の興味関心を土台にしてまず学部の範囲が定まり、次に学力を基準にして志望校を決めるという順序をとるのが普通であり、それに経済的地理的条件が加わり社会的な風潮が影響を与え、親兄弟などの家庭上の問題が制約を加える、といったことになるわけである。そこでこういう過程の中で自分の適性をどのように織りこんで考えてゆかなければならないかということを経導上の立場から考えてみたい。

- ア. 興味関心そのまま適性とは限らないことを周知徹底させる必要がある。一時的な情熱といったようなこともある。漠然とした興味ぐらいならなおさらのことである。多くの学校で行われている2年からの文・理コースの分化はこの一時的興味を固定化させてしまうことになりはしないだろうか。
- イ. 社会的風潮がそのまま志望決定の第一条件とはならないだろうが無意識のうちにこれに乗せられていることは少なくない。特に前述の興味関心を特定の教科に対して持たない者は漫然と大勢に従って就職に便利などところないしは結婚条件に有利になりそうなところを選ぶ傾向がある。適応能力の中の広い者は状況の変化に応じてゆけようが、そうでない者は入学後適性のないことを知って苦しむことにもなるし時勢の変化に対処し切れないことも起りうる。
- ウ. 学力の面にあらわれた得意不得意科目をもって適性の判断をすることも危険である。興味関心の度合

いがあるまま学力の差となってあらわれている場合が多いので、適性とのはずれは前者と同様である。数学の如き積み重ねの必要な教科において、ある一時期一項目につまずいたばかりに後が続かなくなり、理科系そのものへの適性をないものと判断してしまうことなどありがちなことのように思われる。また学力の点のみからみて入りやすいというだけの理由で特別な学部をえらぶ者もいるが、適応能力よほど広い者以外は絶対に避けるべきことである。

- エ. 父兄の進学に対する熱の入れかたは最近とみに高まりつつあるわけだが、自分の子の適性というものには本当の意味では無理解な場合が少なくない。本人まかせにしている父兄もあれば、独断でわが子の進学先を決定させる父兄もある。概して学歴の高い親はわが子に実力以上の期待をかけ過ぎる傾向があり、適性を見過っている場合が少なくない。父親と母親の意見のくい違いも、適性をよく見ていないところから起るものであり、生徒の気持をはなはだしく乱すものである。その意味で、教師と生徒、それに父兄を加えて納得のゆくまでの話し合いが絶対に必要とされるのである。

4. むすび

以上のように、適性ということが常にやかましく問題にされながらも現実には必ずしもうまくいっていないわけなのであって、それを少しでも望ましい方向にもってゆくためには、教師は常に生徒と接触し、各人の性格的特性を把握しておくことが必要となるわけである。また性格テスト、向性テストその他一連のテスト類を十分に活用することも意味のあることと考えられる。そして何よりも、皮相的な意味での適・不適から一步進んで、各人の真の意味での適性を見出させるように生徒をしむけることが大切であろう。

(倉田)

Ⅳ. テーマ能力開発と進路指導

—— 高等学校の進路指導についての一考察 ——

1

高校教育における進路指導の重要さは言うまでもないが、この方法にはいまだ決定的な結論はないといってよい。毎年変動する受験界の動向を注視し、過去の学校の受験生の成績資料に基づき、丹念に現在の生徒

の適応能力と希望とを考慮し、学力を詳細に分析して個人的に指導してゆくというのが一般的ではないだろうか。われわれは前年度のレポートにおいて各学年に次のような目標をたててみた。

- 1年 基礎能力(学力)の充実
- 2年 文科・理科への適応能力の発見